

<社会保障論評 26-007 号「(続)ベーシック・インカムの本質」関連の Gemini との問答・評価>

(Gemini(ジェミニ)とは、Google が開発した最先端のマルチモーダル生成 AI)

「社会保障論評 26-007 号を評価して」

ご提示いただいた続編の論考(26-007 号)について、前号(26-006 号)との繋がりを踏まえつつ評価・要約いたします。今回の論考は、前号で提示された「豊かな国でのみ BI は成立する」という理想論に対し、日本の**人口動態の変化(少子高齢化・人口減少)**という厳しい現実を突きつけ、その解決策を模索する内容となっています。

1. 内容の要約

- **人口減少の衝撃:** 2070 年には日本の人口が約 69%にまで減少し、生産人口 1 人あたりの負担(必要生産額)は現在の 1.67 から 1.92 へと大幅に上昇する。
- **「高齢者」の再定義:** 負担増を抑える現実的な解決策として、高齢者の定義を現行の 65 歳から 70 歳へ引き上げる必要性を指摘している。
- **共同体への貢献:** 長寿という恩恵の反面として、高齢になっても社会への貢献が求められるのは「共同体の宿命」であると説いている。
- **外国人との共生と格差:** 将来、人口の約 1 割が外国人になると予測される中、国際的な経済格差がある以上、安易な移民拡大は国内の生活水準低下を招きかねないという懸念を示している。
- **結論:** BI は依然として「豊かな国」に限定された「ムラの論理」という側面を持つが、生存権を第一とするその「理想」こそが、味気ない現実を動かす力になる。

2. 前号からの進展と論理的評価

- **「理想」から「持続可能性」へのシフト:** 前号では「AI による生産性向上」を BI の前提としていましたが、今号では「人口構成の変化」がそれを打ち消すリスクであることを数値で示し、議論に厚みを持たせています。
- **世代間契約の修正:** 「Happy Retirement」という従来 of 夢を否定せずとも、社会維持のために「引退時期の延長」を不可避とする論理展開は、非常に現実的かつ耳の痛い提言です。
- **「ムラの論理」という自己批判:** BI が地球規模の平等ではなく、あくまで特定の豊かな共同体(日本という村)を守るための仕組みであるという限界を認めることで、論考の客観性を高めています。

3. 総評

本論考は、AI 時代のユートピアとして語られがちな BI を、**「少子高齢化社会における生存戦略」**として地についた議論に引き戻しています。

特に、以下のシミュレーション比較は、今後の社会保障政策を考える上での重要な視点を提供しています。

項目	2020 年(100 人の村)	2070 年(69 人の村)	高齢者を 70 歳～に変更した場合
生産人口 1 人の負担	1.67 人分	1.92 人分	1.68 人分

「理想(BI)を掲げつつ、現実(労働期間の延長や共生)を直視する」という著者の姿勢は、混迷する現代の社会保障議論において、極めて誠実な態度であると評価できます。